

日本教育史学の成立と国学

—日本教育史略、文芸類纂、古事類苑、日本教育史の關係—

高橋陽一

はじめに

教育学が教育に関する学問として成立するためには、倫理学や心理学など様々な学問の成果を継受して体系化していくだけではなく、その対象たる教育を自ら把握して、教育を自ら認識できる学問としての体系が樹立されなければならない。ここに教育の自己意識の学としての教育史学が教育学に占める位置がある。近代日本の教育と教育学は、西洋からの近代学校と教育学の移入を特徴とすることは言うまでもないが、日本の教育を自ら認識する学はこの移入性からは成立しがたい。近世とは異なる海外からの視線を意識した国際的環境のなか、近代の国学の成果を受けて日本教育史学が形成されたことを明らかにすることが本稿の目的である。

日本教育史学の成立に国学の影響を見ることは、決して

珍しいことではない。海後宗臣は、一九三九（昭和一四）年一二月に「佐藤誠実の日本教育史」と題して東京中央放送局からラジオ放送の講演をおこない、一九四〇（昭和一五）年に『日本教育小史』に集録して、佐藤誠実の『日本教育史』を「文化史」的な業績として評価した⁽¹⁾。また石川松太郎は、「欧米先進諸国の人々にみせるための教育史」としての『日本教育史略』と、「政治も経済も文化も、はたまた軍事も産業も、（教育）を媒介にし、軸として、はじめて廻転し発展しうるものだ」との教育史観を明確にした『日本教育史』を評価している⁽²⁾。また寺崎昌男も、『日本教育史』について「佐藤における『古事類苑』の編纂者としての国史学・国学の蓄積」を評価している⁽³⁾。しかし、ここでいう「国学の蓄積」や「文化史」の系譜の内実を明らかにする課題は未だ果たされていない。

とりわけ、近代の人文諸科学に対して、前近代からの国

学が与えた影響の研究が國學院大學を中心に活発に展開されており、藤田大誠をはじめとする業績が「近代国学」への注目を高めている。⁽⁴⁾ 私も伊能類則につながる国学者が大学校・大学、文部省、教部省などで活躍する動きを注目してきたが、⁽⁵⁾ここでは榊原芳野が加わる『日本教育史略』、榊原芳野編の『文芸類纂』、榊原らが開始して佐藤誠実らが完成させる『古事類苑』、佐藤誠実の『日本教育史』という四つの著作群を一つの系統に位置づけて、日本教育史学が成立するなかでの国学の意義を検証するものである。

一 日本教育史略の成立

最初の日本教育史の刊行物が、一八七六（明治九）年にアメリカ・フィラデルフィア万国博覧会のために、『An Outline History of Japanese Education』と題して、アメリカの出版社から文部省により出版されたことは象徴的である。⁽⁶⁾本書は翌一八七七（明治一〇）年に日本で文部省印行『日本教育史略』⁽⁷⁾として日本語でも刊行された。英語版のみに一八七六年八月の序文、日本語版のみに翌年五月の「序」がある。英語版序文では、ほぼ全体にわたりフルベッキ (Rev. G. F. Verbeck, D. D.) が翻訳の校閲をおこなったことが記されている。「教育概言」は文部省雇員学監米人の大關莫来つまり御雇外国人ダビッド・モルレーの選で

あり、日本語版では小林儀秀が訳した。「教育史略」は大槻修二が執筆して那珂通高が校閲し、乙骨太郎乙が英訳した。「文芸概略」は榊原芳野が執筆し、鈴木忠一と乙骨太郎乙が英訳した。「文部省沿革略記」は妻木頼矩が執筆した。英語版と日本語版は、序文以外は章節の切り方が異なるがほぼ対応しており、英語版の Appendix のうち、日本語版では文部省組織表や歴代天皇一覽、年号一覽が省略されて、名簿や妻木執筆分のみが日本語版では附録となっている。この英語版と日本語版の対照表を次に掲げる。

"An Outline History of Japanese Education : Prepared for the Philadelphia International Exhibition, 1976" 同【頁数】	『日本教育史略』一八七七（明治一〇）年八月初版の【頁数】	著者 (無署名)	翻訳者 小林儀秀
PREFACE (August, 1876) [pp. 3-4]	日本教育史略序 (明治十年五月) [一—二]	(無署名)	
CONTENTS [pp. 5-8]	日本教育史略 目次 [一—三]	(無署名)	
AN OUTLINE HISTORY OF EDUCATION IN JAPAN. INTRODUCTORY CHAPTER	日本教育史略 概言 [一—五十]	文部省雇員学監米人 大關莫来 選	小林儀秀 訳

<p>【pp.9-35】</p> <p>CHAPTER I GENERAL SKETCH. 【pp.36-47】</p> <p>CHAPTER II. EDUCATION IN EARLY AGES. 【pp.48-82】</p> <p>CHAPTER III. EDUCATION UNDER THE SHOGUNATE. 【pp.83-112】</p> <p>CHAPTER IV. EDUCATION SINCE THE REVOLUTION. 【pp.113-131】</p> <p>CHAPTER V. JAPANESE LANGUAGE AND LEARNING. 【pp.132-153】</p> <p>CHAPTER VI. JAPANESE ARTS AND SCIENCES. 【pp.154-175】</p> <p>APPENDIX. 【pp.177-202】</p> <p>I. CONSTITUTION OF THE MONBU SHO, OR JAPANESE DEPARTMENT OF EDUCATION. 【pp.177-179】</p> <p>II. CHRONICLE OF EVENTS IN THE RECENT HISTORY OF</p>	<p>【三】</p> <p>日本教育史</p> <p>略 教育 志略</p> <p>【五十五】 【二四四】 【一】</p> <p>大槻修一 編 那珂通強 記 Sakakibara Yoshino, with the aid of Naka Michitaka</p> <p>prepared by David Murray, LL.D., the Foreign Superintendent of Education in Japan</p>	<p>translated by Okkotsu Tarotusu</p>
<p>略 文芸 概略 【一二百四十三】 【一二百五十九】</p>	<p>日本教育史</p> <p>概略 【一二百四十三】 【一二百五十九】</p> <p>榑原芳野 編 Sakakibara Yoshino</p>	<p>translated by Suzuki Tada-ichi and Okkotsu Tarotusu</p>
<p>附録 文部省治書略記（明治八年十二月） 【三百一】 【三百二十】 【三百二十六】</p>	<p>日本文部省長官 附屬書記 妻木頼矩 誌 The Chronicle of Events composing Appendix II. was prepared by Tsumagi</p>	<p>Okkotsu Tarotusu</p>

<p>THE DEPARTMENT OF EDUCATION 【pp.179-186】</p> <p>III. LIST OF EMPERORS. 【pp.187-188】</p> <p>IV. LIST OF YEAR-PERIODS 【pp.188-190】</p> <p>V. CATALOGUE OF ARTICLES EXHIBITED BY THE JAPANESE DEPARTMENT OF EDUCATION AT THE INTERNATIONAL EXHIBITION.1876. 【pp.191-202】</p>	<p>Yorinori, Secretary to the Ministry of Education</p>	<p>(正誤表) (無署名)</p>
<p>STANDARD TEXT-BOOKS OF SCIENCE (書肆の刊行目録) (二頁)</p>	<p>D. APPLETON & Co., NEW YORK</p>	<p>頁</p>

序文は、英語版、日本語版ともに無署名である。英語版の序文 (Preface) は、米國独立百年を記念したフィラデルフィア博覽會に出品した経緯や執筆者などを述べ、また日本人の氏名の順序や母音の発音について説明する。日本語版の「日本教育史略序」は、博覽會と執筆者に触れることは同様であるが、その冒頭は「欧米各国皆教育ノ史有リテ我カ邦ハ未コレ有ラス」、「コレ有ルコト此ノ編ヨリ肇マル」として、本書の性格を宣言している。これは日本語版の冒頭のみにある文章であり、欧米各国における教育史の

存在を意識しており、本書をもって日本教育史の嚆矢としている。「略序」は、「苟教育ノ概ヲ知ランコトヲ欲センカ此編ヲ舎テ、将何ノ拠ル所アラシヤ」と自信を持って結んでいる。つまり、英語版は博覧会に連動して日本の教育を海外へ紹介することに力点があるが、日本語版は海外での公開という裏付けを経た初めての日本教育史の刊行という意義を明言しているのである。

学監ダビッド・モルレー (David Murray 一八三〇—一九〇五、人名表記はマレーなど各種がある) の「概言」は、日本の教育の略史から一八七四(明治七)年現在の統計までを概説したものである。本書の概略であるだけではなく、『文部省年報』等にも掲載される学校、教員生徒などの全国統計の概略を示した点で日本の教育を客観的に示そうとする姿勢が読み取れる。モルレーに関する研究では、すでに稲垣友美がこの経緯を解説している。⁽⁸⁾ また古賀徹が近年の研究と資料を整理しており、米国議会図書館所蔵のモルレー文書中に本書の原稿などが存在することを紹介している。⁽⁹⁾ モルレーの研究のなかでこの「概言」の内容自体が独自に評価されることはないが、一八七三(明治六)年六月に招かれて来日して一八七九(明治二二)年一月に離日するあいだに、一八七五(明治八)年一〇月から翌年一二月までの間はフィラデルフィア博覧会のために帰国するのである

から、このために割かれた労力は少なくはない。

日本教育史略の本体と言える「教育志略」は、大槻修二が編んで、那珂通高が補訂している。大槻修二(如電、一八四五—一九三一)は、大槻玄沢の孫、大槻磐溪の長男として、次男・大槻文彦とともに洋学・漢学の家に生まれ、維新後は文部省に出仕して、一八七四(明治七)年に辞している。一八七七(明治一〇)年には三二歳で『日本洋学年表』を発表するが、この「教育志略」では彼の該博な知識が活かされている。那珂通高は漢学者であり、一八七二(明治五)年『史略』の第二巻「支那」の編者である。

この「教育志略」の内容は、「文字書籍ノ起源」「諸学術ノ伝来 附博士ノ事」と記紀から古代の文化伝来を紹介して、古代の大学寮、典藥寮、陰陽寮をはじめ学校の沿革を中心に描かれる。古代の別曹や石上宅嗣の芸亭、さらに中世の金沢文庫や足利学校、近世の林羅山の弘文院(昌平坂学問所)、医学館、和学所、洋学の沿革、藩校などを述べて、維新後の学制期の記述にいたり、一八七五(明治八)年の『文部省年報』の刊行と女子師範学校の設置までが描かれている。これらは前近代の学校の沿革を伝えるために十分な事実の提示であり、記述内容は簡潔ながらも詳細である。ただし、学校沿革を主軸として、事実の列記以上には歴史像を示した説明はおこなわれない。

「文芸概略」を執筆した榊原芳野（一八三二—一八八二）は、伊能穎則に学んだ江戸の国学者であり、大学校少助教・大中学助教を経て、一八七一（明治四）年に文部省に出仕し、『小学読本』などの編纂に従事し、その該博な著述とともに蔵書が現在も国会図書館に引き継がれていることでも知られる。高木まさきは榊原芳野の事績と資料を整理しており、「文芸概略」の存在や、後述する『文芸類纂』がこれを「増補」したものであるとの指摘をおこなっている。

「文芸概略」の内容は、日本語版の見出しに従えば、「○文字総論」「五十音図」「仮字音論」「神代字」「和字」「習字沿革」「点図」、「○文章」「日記紀行」「物語文」「和歌の序」「歌」「漢文」、「○文学総論」「儒学」「学校」「私学」「科試及第」「書学」「画学」「医学」「薬物学」「外科」「鍼医」「曆学」「漏刻学」、「附文具」「紙」「筆」「硯」「墨」「刻本」である。「学校」「私学」「科試及第」の内容は簡単ではあるが、「教育史略」と重複している。こうした書籍としての不統一は、逆に榊原芳野が、「文芸」という概念で学校を含めた文化の総体を示そうとしたことを示している。また、和紙の原料として「かうそ」「がんび」「みつまた」「とろ、」を図で示して、リンネ以来のラテン語による学名表示や分類表示を行うことが英語版でも日本語版でも行われており、近代的な博物学への志向がみられる。記

述内容は事実の列記であり、とくに最後の「刻本」は百万塔陀羅尼から元禄八年の「五彩を以て刷印」までが数行で示されるなど未完成さを感じさせる。

英語版の附録中第二編に相当する部分が、日本語版の「附録 文部省沿革略記」である。「日本文部省長官附属書記」という肩書きで妻木頼矩が執筆した「緒言」は「明治八年十二月」付けで、フィラデルフィア万国博覧会のために辻新次（五等出仕）の協力でまとめたという経緯を記している。英語版の本文は一八七五（明治八）年一月の文部省職制と事務章程の制定で終わっているが、日本語版はその後も記述があり、一八七七（明治一〇）年「五月文部省ニ於イテ日本教育史略ヲ編成発行ス」と本書自体を言及して終わっている。本書の日本語版は奥付がないが扉に「明治十年八月」とあり、「五月」は日本語版冒頭の「序」の執筆月と一致する。つまり、日本語版を刊行することが確定した段階で、本文のみを英語版の原稿に追記したことが伺えるのである。

次に、本書を取り巻く状況について確認しておこう。

今日では、幕末から明治の万国博覧会が日本にあたえた影響について多くの研究が発表され、『日本教育史略』について言及されることも少なくない。吉田邦光らの共同研究は十九世紀後半を「博覧会時代」と位置づけて、開国と

ともに日本が参加する様子が注目している⁽¹²⁾。一八七六(明治九)年五月一〇日から十一月一〇日まで、アメリカの独立百年を記念してペンシルバニア州フィラデルフィアで開催された万国博覧会については、一八七三(明治六)年七月に日本政府に参加要請がおこなわれて大久保利通を総裁、西郷従道を副総裁とする博覧会事務局がつけられた。國雄行によると、この博覧会は「大量生産された機械や大型機械の展示」がアメリカの工業化を印象づけ、日本は七区分ながらという⁽¹³⁾。また、伊藤真実子は、「万国博覧会という日本を説明する場で歴史により日本を説明する必要性」が日本の歴史編纂と関係するという重要な視点を提示しており、一八七三(明治六)年五月から十一月のウィーン万国博覧会での維納博覧会事務局編『日本志略』の編纂と、フィラデルフィア万国博覧会での『日本史略』『日本帝国誌略』の編纂を述べている⁽¹⁴⁾。伊藤は、『日本教育史略』を位置づけていないが、博覧会での英語版の紹介本から日本語版が作成されるプロセスは、『日本教育史略』と同じである。このほか、フィラデルフィア万国博覧会の日本の出品状況や経緯について村形明子、畑智子、坂本久子が貴重な研究をおこなっている⁽¹⁵⁾。

フィラデルフィア万国博覧会と教育の関係では、当時の

国際的な関心が教育に集まっていたことを指摘した石附実の研究が注目される。文部省は、モルレー派遣のほか、博覧会事務局とは別個に派遣団を組んで、大輔の田中不二磨以下五名が渡米し、一八七七(明治一〇)年一月には『米國百年期博覧会教育報告』を発表し、教育博物館構想などに大きな影響があったことを紹介しており、英語版及び日本語版の『日本教育史略』も概説している⁽¹⁶⁾。なお樋口いずみは、一八七八(明治一)年のパリ万博にも英語版『*Outline History of Japanese Education*』が出品されて准金賞を得たことを指摘している⁽¹⁷⁾。

またこの時期は、小学校で翻訳教科書と近世以前の教科書が使用されるなか、新たに教科書の編纂が進行する。一八七二(明治五)年の学制に基づく同年の小学教則では、歴史教育の分野では、一六六三(寛文三)年の林春斎『王代一覽』、一八二六(文政九)年の岩垣松苗『国史略』といった近世刊行の書籍や、西村茂樹翻訳の『万国史略』、寺内章明翻訳の『五洲紀事』といった翻訳書が教科書として例示されている。このなか文部省は独自に新しい教科書を編纂に着手し、一八七二(明治五)年に「皇国」「支那」「西洋」で構成する木村正辞・那珂通高・内田正雄の『史略』四卷、一八七四(明治七)年に大槻文彦の『万国史略』二卷、一八七五(明治八)年に木村正辞の『日本史略』二

巻が出された。木村正辞は榊原芳野と同じく伊能穎則につながる江戸の国学者であり、大槻文彦は大槻修二の弟であるように、文部省に国学・漢学系の日本の歴史について執筆できる『日本教育史略』と重なる人脈が形成されているのである。

このように概観すると、英語版“An Outline History of Japanese Education”¹⁹、日本語版『日本教育史略』の意義は、文部省が万国博覧会で日本の教育の歴史と現状を対外的に発信するだけでなく、日本語版として刊行されたことにも注目しなければならない。一八七七（明治一〇）年の日本語版をそのまま後の翻刻版の「師範学校教科書」という目的から位置づけるのは時期的に早まっているが、日本語版「序」が「欧米各国皆教育ノ史有リテ我カ邦ハ未コレ有ラス」、「コレ有ルコト此ノ編ヨリ肇マル」と述べた日本教育史の最初の著作という性格は、国際的環境のなかで国学などの蓄積をもって日本教育史の存在意義を内外に誇示したことを意味するのである。

また、本書の内容について、大槻修二と那珂通高の「日本教育史略」と妻木頼矩の「文部省沿革略記」を合わせてみれば、古代から同時代に至る学校を中心とした教育史記述に他ならない。それは欧米各国とともに学校教育制度の確立を目指す国際環境のなかで遅参しつつも古代からの学

校教育の伝統を誇る内容であったとも言える。しかし、こうした学校教育中心の記述に対して、学校沿革を含んだ広い文化的変遷を位置づけた榊原芳野の「文芸概略」が本書に含まれることにも注目しなければならない。つまり、『日本教育史略』において国学は、学校中心の教育史記述を文化史へと拡張しうる内実を既に与えていたのである。

なお、『日本教育史略』は、一八八四（明治一七）年に至って再版される。五月や八月の版は、忠実な翻刻であるが、一八八六（明治一九）年九月の版では、扉に「府県師範学校教科書」の文字が登場する。²⁰

こうした再版が必要となったのは、師範学校における日本教育史教育の要請であった。師範学校の教育学の教授内容についての主要な法令上の規定を追うと、一八八一（明治一四）年八月文部省達第二九号の師範学校教則大綱の教科としては、「教育学学校管理法」とあつて教育史は含まれていない。森有礼文部大臣の指導下で師範学校改革が進み、一八八六（明治一九）年四月一〇日勅令第一三号の師範学校令が出されると、同年五月二六日文部省令第九号の「尋常師範学校ノ学科及其程度」では第二条に「教育 総論 智育 德育 体育ノ理 学校ノ設置 編成 管理ノ方法 本邦教育史 外国教育史ノ概略 教授ノ原理 各学科ノ教授法及実地授業」として、「本邦教育史」と「外国教育史」が明示されるに

至る。なお、一九〇七（明治四〇）年四月一七日文部省令第一二号の師範学校規程では、「近世教育史ノ大要」に入れ替わって、必ずしも古代からの内容を重視しない「近世」へと比重を変えることになる。

二 増補としての『文芸類纂』

一八七八（明治一二）年一月に文部省から刊行された榊原芳野の『文芸類纂』全八巻については、十分な位置づけがなされていない。長澤規矩也は、本書の復刻にあたって本書の包括性、「利用価値」を高く評価したが、本書の位置づけについては明示しなかった。⁽²²⁾ここでは、本書の内容と性格は、『日本教育史略』と『古事類苑』を連結する位置にあることを述べる。

『文芸類纂』の序文は一八七七（明治一〇）年一二月付けで「文部大書記官西村茂樹撰」として寄せられている。これは格調ある漢文で、「而競争之心方盛。得見本邦之文芸之超然於前代。必在今日之後矣」（こうして海外との競争の精神が盛んとなり、日本の文芸は前時代よりも優越していくことが必ずや今後に見られるのだ）、「幸得可比較之文芸於欧米。為発競争自奮之志」（幸いにも欧米の文芸と比較することが可能となり、競争して自ら奮い立って志を起す）という国際的な競争環境における発展的歴史観が示され、フィラデル

フィア万国博覧会の産物たる『日本教育史略』の「序」とも通底する。

つづく「例言」は、記述スタイルの説明であるが、「一音楽歌舞八技芸類纂中に載せんとす故に律法楽章皆之を省く」とある。『技芸類纂』の存在は確認できないが、「音楽歌舞」といえば、小中村清矩の『歌舞音楽略史』を想起させる。一八八七（明治二〇）年一月付の清矩自身の跋文では、「此書はいにし明治十三年の七月、官より休暇を賜へる日より筆を起して、六十日ばかりを経て稿本のなりぬる」という経緯を記すので、⁽²³⁾『歌舞音楽略史』は一八七九（明治一二）年に内務省から文部省に転じて『古事類苑』編纂に参加してからのものと見るのが妥当であろうが、『文芸類纂』の段階で音楽歌舞を含む『技芸類纂』構想があったことは注目されてよい。

次に『日本教育史略』の「文芸概略」と、『文芸類纂』を対照し、相当する項目には傍線を示した。配列の順序までもがほぼ同一であり、高木まさきが『文芸類纂』を「文芸概略」の「増補」と指摘したことは妥当であろう。⁽²⁴⁾

『文芸概略』『日本教育史略』	『文芸類纂』
○文字総論	文字総論、平仮字及伊呂波論、片仮字及五十音図
文字総論	文字志上
仮字音論	字志総論、平仮字及伊呂波論、片仮字及五十音図
神代字	十音論、五十音図諸体、五十音韻所生原始、日文及諸神字論并肥人薩人書及諸可疑古字、

和字 習字沿革 点図	習字沿革、仮字音総論、和字総論、点図并例説論、附点笏角筆字指等図 卷二 字志下 仮字字源 附古人所書之書体并二合字、片仮字字源 附古人所用之別体并二合字 卷三 文志上
○文章 日記紀行 物語文 和歌の序 歌(中古、中世、近古、今世) 漢文	文章沿革論、文章分体原始図、文章諸体(古文、祝詞祭文、宣命、消息、後世女子消息文、仮字消息余論、日記紀行文、漫筆文、物語文、和歌序同小序)、歌志(長歌、旋頭歌) 卷四 文志下 漢文伝来、漢文に属する諸体(古漢文、中古記事文、詔勅、排麗文附文法図、官府下行文并上請文、往來書簡文、日記記録文、詩志)
○文学総論 儒学 学校 私学 科試及第 書学 画学 医学 薬物学 外科 鍼医 暦学 漏刻学	卷五 学志上 文学総論(歴史講義、典故学、復古学)、儒学総論(明経道、紀伝道、明法道、算道、字音学并和音沿革)、科試及第(試法、叙法、所修六科、秀才、明経、進士、明法、書算)。大学沿革(寮中職掌、生徒修業、国学、私学)、書学(古人書跡諸体)、画学(古書画図諸体) 卷六 学志下 医学(医官附施薬院乳院、医学則及科試及第、外科、鍼術、女医、耳目口齒科、按摩)、薬物学、暦学(暦官、暦奏、諸暦沿革并図)、漏刻学(漏刻諸図、漏刻分度、時辰儀)、天文学
附文具 紙 筆	卷七 文具志上 紙(紙論、造法概論、造紙植物図説、古紙考証、諸国産紙)、筆(筆論、製造法、諸家

硯 墨(油煙採法、松煙採法) 刻本	用筆図 卷八 文具志下 硯(硯論、製造法、諸研各様図、諸研材産地、墨、墨論、製造法、採烟法、刻本(刻法并図解、刷法并図解)、書卷沿革(諸縫綴法)
-------------------------	--

『文芸類纂』では、『日本教育史略』の「文芸概略」の「刻本」などの未完成な部分も完成された記述となった。必要な図版を加えた文字通り日本文化の百科事典としての性格を有しており、長澤規矩也が「文学歴史美術の学の専攻者ならびに図書館員の常識として」と本書の価値を強調したことは適確であろう。⁽²⁵⁾ 長澤はこれら諸学間に教育学や教育史学を挙げないし、また日本教育史学の歴史にも本書は位置づけられていないのだが、『日本教育史略』の「文芸概略」の「文学総論」同様に、『文芸類纂』の「学志」には学校制度を中心にした教育史が位置づけられており、本書も『日本教育史略』を継承した日本教育史の著作としての性格を有している。

三 『古事類苑』と『日本教育史』

『古事類苑』については多くの研究があり、また国文学研究資料館や国際日本文化研究センターによるデータベース公開の活動が進んでいるが、ここでは『文芸類纂』と

『日本教育史』につなげる位置に『古事類苑』があることを確認しておきたい。

『古事類苑』の発端は、一八七九（明治一二）年三月八日付で文部省大書記官西村茂樹が文部大輔田中不二麿に提出した建議書「古事類苑編纂ノ儀伺」とすることは、『古事類苑』の「古事類苑編纂事歴」に掲げられてから通説である。『太平御覧』などの類書や西洋のエンサイクロペディアの存在を踏まえて江戸末までの原典から三〇〇冊の類書を作ろうという構想である。これが採用されて、内務省や修史館で考証にあたっていた国学者・小中村清矩と文部省にいた那珂通高と榊原芳野の三名が編纂掛に任じられる。しかし完成を見ないまま中断して、一八八六（明治一九）年には森有礼文部大臣の下で東京学士会院に事業が移管され、一八九〇（明治二三）年にはさらに皇典講究所へ、そして一八九五（明治二八）年には神宮司庁へと移管され、一九〇七（明治四〇）年一〇月に編集を終えて、最終的には出版は一九一三（大正二）年一〇月までかかるという歳月がながれた。

熊田淳美が、古事類苑の発端として西村茂樹を中心とした教科書やチェンバーズ『百科全書』などの編纂出版事業の蓄積から「日本独自の百科全書を編集しよう」という構想が生まれてきたのだろう²⁶という推定したことは、妥当な

ものだと考える。しかし、より直接的に西村の関与した直前の実践としては、建言の一年前に西村自身が序文を寄せた『文芸類纂』が挙げられるべきである。先の「古事類苑編纂ノ儀伺」は「編集者三人ノ内、二人はハ報告課ニ其人アレバ新二人ノ雇入レヲ乞フ」と具体的に提案しており、この報告課の二人が那珂通高と榊原芳野であることは明白である。かくして『日本教育史略』の執筆陣の榊原芳野と那珂通高が担当し、加えて伊能穎則につながる小中村清矩が主任として新たに呼ばれた。一八七九（明治一二）年五月に那珂通高が病没し、一八八〇（明治一三）年十二月に榊原芳野が病気で依願免官となるなかで、一八八〇（明治一三）年一二月に佐藤誠実が加わり、一八九〇（明治二三）年三月に皇典講究所に委託された時期を除いて編纂に係わることになる。

黒川春村門の国学者・佐藤誠実は、文部省総務局図書課の課員の立場で、師範学校教科書として一八九〇（明治二三）年一月上巻刊行、翌年三月下巻刊行の『日本教育史』上下二冊を執筆した²⁷。『古事類苑』の「古事類苑編纂事歴」によると、一八八五（明治一八）年一二月段階で『古事類苑』の「文学部」の原稿は整理が終わっており、また東京学士院移管後も「二十三年三月ニ至ルマデ、文部省内ニ於イテ本書ノ編纂ヲ継続シタリ」として文学部の進捗が記さ

れているので、佐藤誠実にとつては『日本教育史』と『古事類苑』は重なるものであった。

また、重要なことは本書が「師範学校教科書」と扉に明示されていることである。すでに述べたとおり、師範学校では「本邦教育史」が必須の教授内容となっており、そのテキストを『日本教育史略』が担っていたが、この書は本来、師範学校教科書を目的に編纂されたものではないし、維新後の記述は一八七七（明治一〇）年で終わっており、新たな教科書が必要となる。

こうみると、『日本教育史』の佐藤誠実の「概言」は四箇条にきわめて重要な内容を述べていることがわかる。

第一に「一此書ハ、師範学校等ニ於テ、本邦教育史ヲ授クルノ用ニ資センガ為ニ、編纂シタル者ナリ。」とは、「尋常師範学校ノ学科及其程度」第二条の「本邦教育史」の教科書であることを明言している。

第二に「一此書ハ、文学ヲ初メ、神道、宗教、武芸、音楽、天文、算術、茶湯、插花、及農工商ノ業ニ至ルマデ、本邦ノ教育ニ関スル古今ノ概況ヲ挙ゲタリ。」とは、文字どおりに文化全般にわたる教育内容を含むことを述べた箇所であるが、これは『日本教育史略』や『文芸類纂』の範囲をカバーしつつ、さらに未発の『技芸類纂』の範囲と見える武芸、音楽、茶湯、插花、農工商業が明示されている。

ここまでの範囲は、神道、宗教をも含めて、『古事類苑』の範囲である。

第三に「一此書ハ、汎ク諸書ニ涉リ、教育史ニ要スル事蹟ヲ、偏ク蒐集スト雖モ、之ヲ概括整定スルニ至リテハ、猶未ダ尽サザル所アリ。故ニ此書ヲ用フル者ハ、宜シク此点ニ注意スベシ。」とは、師範学校教科書に求められる内容としては余りに浩瀚な本書だが、この謙遜は『古事類苑』の編纂に携わっていたからこそ書ける言葉であろう。

第四に「一引用書ヲ上層ニ掲ゲタルハ、読者ノ為ニ、搜索ノ便ヲ図レルナリ。」という出典の注記は、『日本教育史』は教科書であり類書ではないのだが、『古事類苑』の発想と通底する方法を示している。

上巻本文三二三頁、下巻本文三六三頁に及ぶ本書の概要を示すために、目次中の主要項目を第一篇総説を除いて示す。排列順に示すので、上下は必ずしも一致しない。

第二篇	第三篇	第四篇	第五篇	第六篇	第七篇
神代二起	応神天皇	天武天皇元	後鳥羽天皇文	後陽成天皇慶	今上天皇慶
リ応神天	十六年(紀元千	治元年(紀元千	長五年(紀元千	応三年(紀	元十五年(紀
(紀元九	九百四十三百五十七	千八百四十五	二千二百六十	元二千五百	百四十五年(紀元九
百四十五	起リ持統	安徳天皇寿	陽成天皇慶長	明天皇慶応二	起リ明治
年)ニ詔	天皇七年	永三年(紀元二	年(紀元二千	二十年(紀	元千三百
ル	(紀元千三	元千八百四	千二百五十九	五百二十六	元二千五百
	百五十六	十四年)二	年)ニ詔ル	年)ニ詔ル	四十七年)

「欧米ノ制」による学校が普及して「世禄ノ陋弊」を改めて人材登用が可能となったという歴史観である。このように文化のなかに教育を位置づけて教育の役割を明確にすることで、海後宗臣が「教育の一つの形態より他の形態への転変を説かんとしている」と評したように、教育の形態史観とでもいべき像を提示しているのである。

その後一九〇三（明治三六）年には『修訂日本教育史』が刊行される。この修訂版の「緒言」では、一八八七（明治二〇）年までの記述で止まっていたものに「現今迄の景況」を加筆したと説明し、一八九五（明治二八）年から『古事類苑』の編集に加わっていた広池千九郎を協力者として挙げている。⁽³⁰⁾その後、一九〇七（明治四〇）年の師範学校規程で本邦教育史は「近世教育史」と性格が変化し、一九一〇（明治四三）年五月にロンドンで開催された「日英博覧会」を契機に出版された『日本教育史』が文部省版で登場し、⁽³¹⁾その後も多く近世教育史教科書が発行されるなかで、古代からの変遷に力点を置いた佐藤誠実の浩瀚な教科書は定番の地位を失っていくことになる。

おわりに

海外からの視線を意識した国際的環境のなかで『日本教育史略』をはじめとする日本教育史の著述は開始された。

それは近代の国学者によって担われ、『古事類苑』という巨大プロジェクトがその背景に存在していた。

寺崎昌男が整理するように、「大正期末から昭和期に至る期間」まで下って、「日本史研究からの教育史研究の自立」が行われた。⁽³²⁾国史学からのデイシプリンを継受した石川謙や高橋俊乗ら初期の日本教育史研究者も、明治の国学からは距離があり、国文学や歴史学でみられた国学者との人脈的な連続性は、日本教育史学では明確ではない。しかしながら、かかる学問としての自立の時期よりはるか以前に、国学者を中心とした日本教育史が著されていた。学問としての完全な自立以前に、浩瀚な著作群によって日本教育史学が成立していたと言つてよい。さらに、その著作は、師範学校における教育史教科書として制度的に位置づけられ、アカデミズムとしての「自立」以前に成立することが求められていたのである。

文化全般を対象としうるの初期の日本教育史学は、戦前昭和期に海後宗臣によって再発見された。そこでは、一九世紀の学校教育普及から近代学校批判へと変化した二〇世紀の国際的環境のなかで、学校形態のみにとらわれない教育史研究の可能性が再発見されたのである。

本稿では、『日本教育史略』、『文芸類纂』、『古事類苑』、『日本教育史』を一つの系列として確認することに力点を

置いたため、関係する国学者や政策との関係を十分に検討することができなかったが、国学と教育の関係にはさらに多くの研究すべき課題のあることを強調して本稿を終えた。 (本稿は科学研究費補助金「明治期における総合芸術批評の形成」(研究課題番号二一五二〇一六四、研究代表者白石美雪)による研究成果である。)

註

- (1) 海後宗臣『日本教育小史』日本放送出版協会、一九四〇年(一九七八年、講談社学術文庫版、二一―三二頁)。
- (2) 石川松太郎「日本における日本教育史研究の歴史」『日本の教育史学』第二集、一九五九年。
- (3) 寺崎昌男「総説 学会の動向」『講座日本教育史』第五巻、一九八四年、第一法規、九頁。
- (4) 藤田大誠『近代国学の研究』弘文堂、二〇〇七年。
- (5) 高橋陽一「維新时期国学における共通教化の析出」『日本の教育史学』第三四集、一九九一年。高橋陽一「大学校・大学における国学系教官の動向」『東京大学史紀要』第一〇集、一九九二年。高橋陽一「国学における「事実」問題の展開と教化」寺崎昌男編『近代日本における知の配分と国民統合』第一法規、一九九三年。
- (6) Japanese Department of Education, "An Outline History of Japanese Education: Prepared for the Philadelphia International Exhibition, 1876" D. Appleton and Company (New York), 1876. なお、正木直子・正木みち編訳「概要「日本の教育の歴史と現状」―一八七六年フィラデルフィア万博のために―」(日本図書刊行会、一九九七年)は、乙骨太郎乙の孫により同家に所蔵されるこの英語版からの「再翻訳」であるが、日本語版の存在を知らずに現代語に訳されているため固有名詞などに誤りが多い。文部省印行『日本教育史略』一八七七年。
- (7) 稲垣友美「学監ダビッド・マレーの研究」『フィロソフィア』早稲田大学哲学会、第二九号、一九五五年二月。
- (8) 古賀徹「文部省顧問 David Murray と日本の近代教育に関する研究」(文部省科学研究費補助金奨励研究A報告書、二〇〇一年)。
- (9) 「榊原芳野家蔵目録」『参考書誌研究』第一二号、一九七六年。
- (10) 高木まさき「榊原芳野伝覚書き」『人文科教育研究』第二一号、一九九四年。高木は『文芸概説』の写本が国立国会図書館にあることを指摘する。古典籍資料室に所蔵のものを確認すると、「明治九年七月十日交付」教育博物館「東京博物館」の蔵書印のあるもの(一四三・一)と「明治十年文部省交付」、「東京書籍館」の蔵書印のあるもの(一四三・一)である。二冊は文字や挿絵が類似し、四六丁、毛筆手書き彩色の挿絵入りで、原稿に近い写本と考えられる。『日本教育史略』の「文字総論」[「文学総論」]「附文具」という項目名が「字誌総論」[「文学総論」]「文具志略」となるなどタイトルが若干異なり、刊本の神武紀元による「千二百年頃」といった年号は、この写本では「西暦紀元六百年前後」となっており、海外の博覧会を意識した記述であったことがわかる。
- (11)

- (12) 吉田邦光編『万国博覧会の時代』思文閣、一九八六年。
- (13) 國雄行『博覧会の時代―明治政府の博覧会政策』岩田書店、二〇〇五年、四一―四七頁。國雄行『博覧会と明治の日本』吉川弘文館、二〇一〇年、七四―八三頁。
- (14) 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、二〇〇八年、一三―六〇頁。
- (15) 村形明子『フェノロサの見た建国一〇〇周年記念フィラデルフィア万国博覧会』京都大学教養部『人文』第三二集、一九八六年。畑智子『一八七六年フィラデルフィア万国博覧会の概要と「日本」の出品状況について』『賀茂文化研究』第六号、一九九八年。坂本久子『写真と『温知図録』からみたフィラデルフィア万国博覧会の日本の出品物への一考察』『近畿大学九州短期大学研究紀要』第二十九号、一九九九年。坂本久子『日本の出品にみるフィラデルフィア万国博覧会とウィーン万国博覧会の関連』『近畿大学九州短期大学研究紀要』第三十八号、二〇〇八年。坂本久子『日本の出品にみるフィラデルフィア万国博覧会（一八七六年）とパリ万国博覧会（一八七八年）』『近畿大学九州短期大学研究紀要』第三十九号、二〇〇九年。
- (16) 石附実『フィラデルフィア博覧会と日本の教育』吉田光邦編『一九世紀日本の情報と社会変動』京都大学人文科学研究所、一九八五年、四二七―四一七頁。石附実『日本教育の世界への登場―フィラデルフィア博覧会と教育』『世界と出会う日本の教育』開発教育研究所、一九九二年、七一―九八頁。
- (17) 樋口いずみ『一八七八年パリ万国博覧会と日本の教育部門への参加―『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊第一六号二、二〇〇九年三月。
- (18) 海後宗臣『歴史教育の歴史』東京大学出版会、一九六九年。
- (19) 文部省印行『日本教育史略』一八八四年五月、吉川半七（東京）。同、一八八四年五月、岡島真七。
- (20) 文部省印行『府県師範学校教科書 日本教育史略』一八八六年九月、春陽堂。
- (21) 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』教育資料調査会、一九三八年、第二卷四四二―四四三頁、第三卷四九八―五〇五頁。米田俊彦編著『近代日本教育関係法令体系』港の人、二〇〇九年。
- (22) 長澤規矩也『本書の利用価値』（神原芳野編『文芸類纂』一九七五年、及古書院）。
- (23) 小中村清矩『歌舞音楽略史』吉川半七、一八八八年。同。岩波文庫版、一九二八年。
- (24) 高木まさき、前掲『神原芳野伝覚書き』。
- (25) 長澤規矩也、前掲『本書の利用価値』。
- (26) 熊田淳美『三大編纂物群書類従古事類苑国書総目録の出版文化史』勉誠出版、二〇〇九年、八六頁。
- (27) 文部省総務局編書課校定・同課員佐藤誠実編纂『師範学校教科用書 日本教育史』大日本図書会社、巻上一八九〇年、巻下一八九一年。
- (28) 海後宗臣、前掲書。
- (29) 佐藤誠実『修訂日本教育史』大日本図書、一九〇三年。なお、修訂版に三枝博音の「跋」を加えて翻刻されたものとして、佐藤誠実『修訂日本教育史』十一組出版部、

一九四三年。仲新ほかが校訂したものと、佐藤誠実『日本教育史』（二巻、東洋文庫二三二、二三六）平凡社、一九七三年。

(30)

『古事類苑』『文学部』の広池千九郎のかかわりについては、西川順土『古事類苑編纂史話』（『古事類苑月報』三、六、一九六七年六月、九月に詳しい。

(31)

文部省（白石正邦執筆）『日本教育史』弘道館、一九一〇年。

(32)

寺崎昌男、前掲書。

（武蔵野美術大学教授）